

支那だまり

No.36 1989.12

土木の視界……「国際防災の十年」の進展
From the outside……土木とランドスケープ
知のアンテナ……情報化社会を支える通信技術
海外レポート……カナダ留学雑感
談論風発……「水のなんでも小事典」執筆を終えて
女性の目……『マドンナ』症候群のみなさんへ
留学生の声……日本に学ぶ
Zoom in 土木工事……「梅田地域の北上」
広報



「国際防災の十年」は今世紀最後の十年に、地球上の自然災害を軽減するために個人や団体、あるいは世界の国々がおおいに努力しようという国際的な運動であり、間もなくスタートすることになる。「国際防災の十年」については土木学会誌の防災特集号など、これまでもいろいろな機会に紹介しているので、できるだけ重複を避け、その後の情勢などを報告したい。

2
まず、国内では5月に内閣総理大臣を本部長とする推進本部が設けられ、事務局である国土庁を中心として各省庁がそれぞれに準備を始めており、来年度の概算要求にも計上されている。それらの中には、これまで各省庁で行われてきた防災関係の事業の延長上のものであるが、新しい計画もある。例えば、国土庁では来年秋に、「国際防災の十年」の開始を記念しての国際シンポジウムの開催を計画している。これには他の省庁も協力して開催する方向で検討されており、また、いくつかの国際機関に共催や後援を依頼することも計画中である。これには日本学術会議も協力することになると考えられ、行政機関のみならず、研究者をも結集したものになるであろう。シンポジウムの内容はまだ検討中であるが、「国際防災の十年」の発足を記念する式典の部分と技術的な課題や学問的な諸問題に関する部分とから構成されることになろう。

学術分野での「国際防災の十年」に関する検討

■「国際防災の十年」の進展

京都大学防災研究所
土岐 憲三

は「国際防災の十年懇談会」や自然災害総合研究班によって行われてきており、それらの場での活動や検討内容についてはこれまでも報告してきた。「国際防災の十年」が米国の科学アカデミーの会長によって行われたことから、米国のみならず、日本でも研究者が最も早くからこの問題に取り組んで来ている。これまでは、どの様にしてこれを国全体の問題として推進させるかについて多くの努力を払ってきたが、政府もこの問題に取り組みを始めた現段階では、研究者は本来の研究に関わる問題に取り組むべき時期にきている。そこで、「国際防災の十年」において研究者は何をすべきか、何ができるかなどについての提言を行うことになり、去る9月には日本学術会議災害工学研究連絡委員会から「国際防災の十年、災害科学研究者からの提言」という小冊子が刊行された。ここには、国際共同研究の重要性、基礎研究の推進の必要性などに関しての提言が行われ、その実現には何が必要であるかなどについても言及している。

21世紀における自然災害の防止と軽減のための基礎は、20世紀における基礎的な研究と技術の蓄積にある。今日の日進月歩というべき科学技術の進展を考えると、21世紀においてさらに防災の実をあげるためには、「国際防災の十年」の重要な課題に、次の世代に目を向けた基礎的な研究が含まれるのは当然である。このような観点から、早急に着手すべき多くの研究課題を

提案し、それらを実行しうる方策を考えることは自然災害に関わる研究者の責務である。こうした観点から、上述のような提言を行ったが、国際共同研究、基礎的研究などの具体的な研究課題をさらに詳細な形で提案するために、自然災害総合研究班の国際情報委員会を中心として、検討が始められようとしている。

行政機関による防災関係の施策は研究による裏付けのある技術によって実際の場を実現されることになるが、これまでの「国際防災の十年」は主として行政機関と学術分野によって推進されてきており、民間の団体の関与が多くない。従って今後はさらに会社などの民間団体をも含めた、官民学による国内委員会を結成して「国際防災の十年」の運動をさらに幅の広いものにする必要がある。

国際社会でも徐々にこの運動に対する関心が高まりつつあり、特に先進諸国では国内委員会がヨーロッパの諸国を中心として次々に設けられている。米国においては、議会はすでに昨年「国際防災の十年」の賛成決議をしているが連邦政府も次第に関心を示し始めているようである。日本政府は専門家会議を開催するための経費を国連に対して拠出したが、米国政府も国連に対して、「国際防災の十年」のための経費の拠出をしようとしているようである。また、9月に米国を訪問したソ連の代表団は軍縮に関する諸問題のほかに、自然災害に関しても協力を申し出

国際防災の十年

災害科学研究者からの提言

日本学術会議
災害工学
研究連絡委員会

1989年7月

**International
Decade
for
Natural
Disaster
Reduction**

気象衛星「ひまわり」から
見た1979年台風19号



たとのことであり、この分野でも国際協力が進展しているようである。

国際社会に対する日本の貢献が多くの分野で期待されているが、研究の分野においても同様であり、経費を出し合っの国際共同研究などの申し入れが次第に増えると考えられる。然るに、このようなケースに対応しうるのは極めて限られた場合のみであり、先進諸国との大型の共同研究は欧米の大学と日本の民間の研究機関との間のものが主である。このような状況を考えると、国際共同研究を推進しうるような枠組みを一日も早く設けることが肝要である。

For constructions, the most essential point is to study their imaginal principles.

Items of above studies are,

Understanding characters of landscapes related to land and water, the planner should condense his design spirit at any sites, with ideas of natural landscapes for harmonizations of constructions at given surroundings...

Studying models of excellent construction works new and old, the planner should create his works of the construction at response of himself, for succedance on citizens' needs....

Researching landscape sites at the widest vision to master their spirits, that is, to abstract the planning principles, the planner should build up civil engineering with landscape localities, for the development of total landscape....

今から千年近い昔、宇治の平等院を造営した藤原頼道の子として生まれた橘俊綱は、出生に恵まれながら立身には遠い境遇の中で世を過しましたが、世界最古の作庭書「前栽秘抄」（別名「作庭記」）を遺したと伝えられます。その序文について「立石」（作庭）という意味の言葉を「建設」「開発」「計画」「土木」のニュアンスに置きかえて英文化したのが以上の文章です。ランドスケープアーキテクチュアという土木のア

■土木とランドスケープ

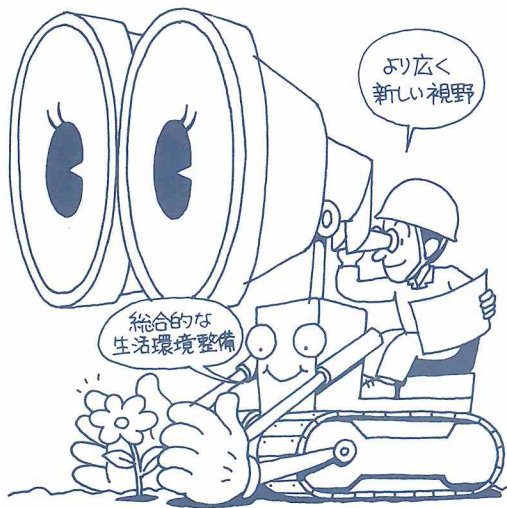
奈良女子大学教授
近藤 公夫

ウトサイダーとして、土木に何か申し上げる言葉があるとすれば、それは上記した王朝人の言葉につきるようです。

しかし、以上で終わりますと話が抽象的にすぎると同時に今日の緑の話は千年前から進歩していないのか、と云われかねません。もう少しランドスケープアーキテクトとして土木の世界への「思い入れ」を述べましょう。

今、アーキテクトと書きましたが、これは建築家と云う意味ではありません。この言葉はギリシャ時代から使われ、その原義は「諸技術工学の総括者、コーディネーターあるいはトータルプランナー」と訳せましょう。土木技術者こそ本来のトータルプランナーである筈です。京大の頃、土木学概論の講義で「土木技術はミリタリーエンジニアリングに対するシヴィルエンジニアリングであり（市民の生活環境を築く）総合的な視野をもって今は土木技術外となっている分野にも常に配慮を」と云う旨の話を聞きました。また他の機会には同じ教授の講演で、「天橋立の風景と調和した作品（回旋橋田橋）は土木を専攻した者として本懐だった」と云う旨の話も聞きました。その様な話を思い出すと土木技術とは総合的な生活環境整備を目指すものであり、景観への配慮も高いのが本来の姿なのだ、と云えそうです。

私なりの思いとしては「土木とは市民社会のための工学であり、後世に伝えるモニュメント



を創造する豊かな機会に恵まれ、幸福と責任とを併せ持つ世界であり」それだけに「土木技術者は明日の市民生活環境を整備する建設者としての自覚を求められる」と考えます。そして10余年後に新世紀を迎える今日「新しい時代の市民社会が持つ多様かつ流動的なニーズに対応するため、より広く総合的な視野の下に、新しい工学システムを構築すべき脱皮が課題視されるのではないか」と存じます。

その様な新時代の例を日本の歴史に求めますと、紀元7世紀の条里による国土改造、天平文化に象徴される日本社会の文化的開花に基盤を与えた建設、が指摘されます。それと同様に今日の土木は、産業革命が生み出した社会の構造的な変化を予見し、それに対応する環境整備を達成して次代文化の建設基盤となる必要があります。しかも、40万平方方に足りぬ国土に1億2千万人余の人口が世界最高水準の経済活動を展開

しつつある中での国土改造、それは世界の歴史に未曾有の建設活動であり、従来の日本技術社会が旨とした先進技術の摂取では糊塗できない、より広く新しい視野を以て確立されるべき文化建設なのです。それが7世紀の国土整備における文化の開花に至る国土整備の成功に比肩するには、解決に樂觀を許さない多くの問題がある筈です。

先に30余年前の土木学が、より広く総合的な見方を持つように、景観問題を含み指摘、教授された思い出をあげましたが、その必要は今日さらに高いと思います。知人の考古学者には古代の環境整備プリンシプルに今日のプランナーが学ぶ所も多いのではの声もあり、ランドスケープの立場から地形造成のメカニカルな定規は変えようがないのかの不平もあります。そのように土木技術の隣接領域における知見を生かし新しい分野への挑戦を求める姿勢（それを忘れれば土木技術者を活動領域の限られた「昨日の専門家」とする危険）こそ必要なのです。

まして新しい世紀の原理と云われる「多様な価値観の共存」に環境整備が対応するため、その主力であるべき土木工学は新しい総合科学に脱皮する努力を要する今です。そして、その具体的な課題として、日本国土の自然と文化に醸されたランドスケープに関する学習こそ、明日の建設を考える原点の確立に不可欠と考えるのです。

■情報化社会を支える通信技術

大阪市都市工学情報センター
岡田 憲生

現代は情報化の時代と呼ばれている。ケーブルテレビ、CATV、ハイビジョン、文字多重放送、衛星通信、光ファイバーケーブル、VLAN、LAN等の情報通信に関する新しい用語が毎日のように新聞・テレビなどのマスコミに登場し、現実私達の生活の中に入ってきている。

事務所や工場における日常業務のオートメーション化をはじめ、家庭でのパーソナルコンピュータ利用による生活情報の入手・処理、スーパーマーケットのレジのPOS(端末)による売れ筋情報の分析・在庫発注管理など身近かなところにも情報化が浸透している。一方では、通信網の発達により世界の隅々の経済情報が24時間地球を駆け巡り、ロンドン・ニューヨーク・東京などの為替市場の値動き等が直接・間接的に日々の生活と係わりをもつ時代ともなっている。

このような情報化時代を迎えた背景には、コンピュータの発達はもとより、光ファイバーや通信衛星などに代表される新しい通信技術の開発と、それらを有機的に融合させるシステムの進歩がある。

古くからその技術開発が期待されていた光通信は、高性能の光ファイバーの開発によって実用化された。従来の銅ケーブルでは約1.5

kmごとに中継器が必要であったが、高純度石英ガラスの光ファイバーは10kmで光の強さが半減する程度の低損失のものであり、20~30kmを無中継で伝送できるようになった。また、光の周波数はマイクロ波に比べて 10^4 も高いことから多くの情報が伝送できること、電気を通さない光ファイバーは電力線や雷など外部の影響がなく品質の低下が少ないこと、さらには、軽量・布設簡便で安価なことなど優れた特性をもっている。

一方、衛星通信は、昭和40年のアーリバード衛星打ち上げ以来、国際通信の中核として目覚ましい発展を遂げ、テレビ中継や国際電話などの需要を担ってきた。我が国の通信衛星の幕開けは、昭和58年打ち上げのCS-2aに始まるといえるが、平成元年に入り民間会社による通信衛星が打ち上げられ本格的な民間利用が始まりつつある。衛星通信には、大量の信号を高品質で伝送できる機能はもとより、地球的スケールで広域をカバーすること、同時に多地点への送信ができること、地震・台風等災害の影響なしに通信回線を確保できる強みなど、地上通信にはない機能ももちその利用が拡大している。

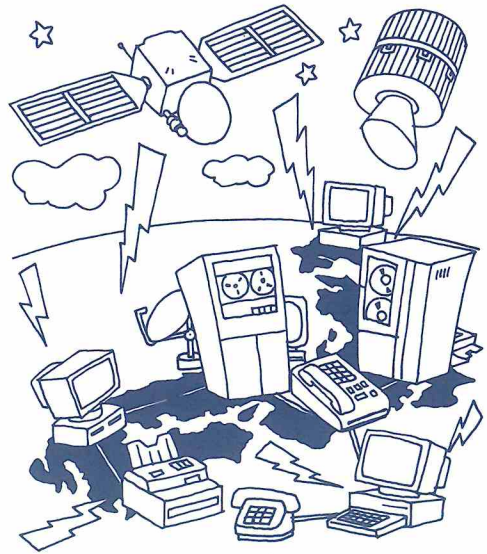
通信網には、電話・電報・テレックス・データ通信網などがあり、これまで、それぞれ

のサービス毎に独立して発達してきたが、データ通信など非電話(デジタル)系サービスの増加にともない、主にアナログ方式で伝送する電話網は利便性・経済性の両面でその非効率性が問題となってきた。

電話は歴史も古く、その通信網が最も発達し、また各家庭までくまなく張り巡らされているものであり、通信網としての利便性が極めて高いものであるが、データなどのデジタル情報を伝送する場合にはこれをアナログ波形に変換する必要があり、伝送速度の制限・歪や雑音の増加の他に経済性等の問題があった。

このため、電話網を遠隔地まで正確に大量の情報を経済的に伝送できるデジタル通信網化し、これとDDX(デジタルデータ変換)網やファクシミリ網などのデジタル通信網と一体のものとする、総合デジタル通信網(ISDN)の構築が世界的な流れとして進められている。

我が国ではNTTがINS(総合デジタル通信サービス)としてその整備を推進している。昭和60年2月北海道から九州まで一貫した光ファイバーケーブル幹線が完成し、その後ネットワークの充実と交換機のデジタル化が進められ、昭和63年12月末現在、政令指定都市を中心に28地域でISDNサービスが可能となり、さらに地方都市まで拡大しつつある。



情報化を支える高度な情報通信システムは、道路・鉄道他の公共施設と同様に、都市基盤の要としてその整備・充実が希求される時代となった。いま、情報の港というべき通信基地“テレポート”の建設などが大阪をはじめ各地で推進され、情報化時代の地域の核としての機能が期待されているところである。

今後とも、ISDN整備のほか、多種多様なコンピュータ網の相互接続、移動体通信の普及などが進み、ますます高度な情報化社会へと進展していくものと考えられる。既に、家庭に居ながら種々の情報を入手し取り扱える時代を迎えており、ますます増える身の回りの多くの情報から必要な情報を取り出し、分析し、取るべき行動の選択をするのはコンピュータではなく我々人間の役割であり、このための能力の向上に努めることが高度情報社会に生きる者にとっては是非必要であろう。

Series No.13——カナダ

■カナダ留学雑感
大阪大学 阿部 信晴

カナダのプリティッシュ・コロンビア大学 University of British Columbia (U B C) 土木工学科に滞在する機会を得、1988年10月中旬から10ヵ月間、家族と共にバンクーバーでの生活を経験することができた。ここでは、短い滞在期間でのものであるが、思いつくままにカナダの印象について述べてみたい。

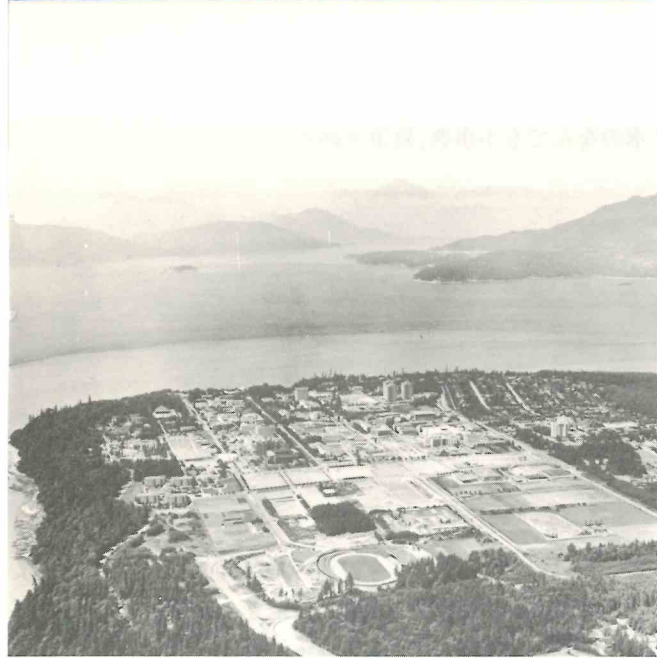
U B Cのあるバンクーバーは人口約140万で、トロント、モントリオールに次ぐカナダ第3の都市であり、カナダで最も活気のある工業港でもある。海あり山ありの環境はすばらしく、清潔感のある都市である。治安状態も良く、市民の礼儀正しさはここでの生活の印象を爽やかなものにしてている。また、この海と山のおかげで、雨は多いものの、バンクーバーはカナダの都市としては例外的に穏やかな冬を過ごせるところである。今年の冬、カナダは十数年来の寒波に見舞われ、カルガリーでは -40°C の極寒が一週間も続き、市民生活はマヒ状態になった。しかし、バンクーバーではそれほど気温も下がらず、4度ばかり雪が降っただけであった。

U B Cはバンクーバーのポイント・グレイ半島に位置するウェスタン・カナダ最大規模の総合大学である。キャンパスとEndowment landと呼ばれる周辺の森林地域を含めた総面積は3,000エーカー以上(1,200万 m^2 、360万坪)にもなる。この森と海に囲まれたキャンパスに、12のfaculty、10のschoolと多くの研究所、研究センターが点

在しており、36,000人の学生が学んでいる。

欧米の大学における有能な秘書とTechnicianの存在についてはこれまでも耳にしていたが、U B Cにおいても講義資料の作成、論文のタイピングといった事務的な仕事のほとんどは秘書が担当しており、研究スタッフは雑務(?)から解放されている。また、実験棟にはワークショップがあり、ここに機械、電気、プログラミングなどを専門とするTechnicianがつめている。事ある毎にTechnicianの厄介になっている様子を見てみると、情けない気もするが、また、羨ましいかぎりでもある。研究を進める上でTechnicianの積極的な協力が不可欠なようで、Technicianに対する研究スタッフの気の遣いようは大変なものである。教授宅での研究スタッフのパーティーに出席したが、Technicianの多くも招待されていた。ベテランTechnicianと教授はファースト・ネームで呼び合っており、Technicianの実力を示すものとして興味深かった。

しばらく生活してみると、カナダが様々な面でアメリカの影響を強く受けていることがわかる。しかし、この点はカナダ人にとっても気になるところのようで、アメリカの影響力に対する反発は強い。アメリカとの貿易自由化問題についても様々な議論があり、連日、新聞をにぎわしていた。また、酸性雨問題、アメリカタンカーのオイル漏れ事故についてのカナダ政府のアメリカに対する弱腰は、多くのカナダ人の不



満の種となっている。

カナダ滞在中に1ヵ月間、アメリカを訪問した。自ずとアメリカとカナダを比較することになったが、アメリカは良い意味でも悪い意味でも刺激的であるのに対して、カナダは落ち着いているという印象が強く残っている。両者の違いはグランド・キャニオンとカナディアン・ロッキーの違いに代表されるような気がする。いささか皮相的な譬えではあるが、当たっていると思う。また、アメリカ人はfrankではあるが、aggressiveなのに対して、カナダ人は、どちらかと言えば、控え目でさっぱりしている。

カナダは、アメリカと同様に移民によって発展してきた国であり、現在も多く移民を受け入れている。しかし、移民に対する政策はアメリカとは異なっている。カナダ政府は、移民に対して移民後もそれぞれの固有文化を維持して生活することを奨励しており、いわゆる多様文化主義をとっている。このため、カナダは、アメリカが「人種のるつぼ」と呼ばれているのに対して、「人種のモザイク」と呼ばれている。この

政策による住み分け的な効果と比較的良好な生活環境が維持されているために、現在のカナダでは人種間の摩擦があからさまに表立つことはないようである。

しかし、勿論、カナダにこれまで人種差別が無かったわけではない。特にアジア系移民に対しては酷しい人種差別の歴史がある。滞在中、戦前カナダにいられた日系カナダ人に会い、話をお聞きする機会があった。第二次大戦中にアメリカ以上の過酷な財産没収・強制収容などの扱いを受けた人々のカナダに対する思いは複雑なようである。

バンクーバーの日本人街は中国人街と較べる術もないほどさびれ、スラム化している。四十数年前の不幸な出来事、日系カナダ人の高齢化などが原因していると言われているが、バンクーバーに溢れる日本人観光客・ビジネスマンとは不思議なコントラストである。短期的に滞在する日本人の派手な生活振りを日系市民はむしろ迷惑だと言う。日本の繁栄(?)は日系カナダ人の上に複雑な影を落としているようである。

カナダにはアメリカとの類似点も多い。しかし、決してアメリカのコピーのような国ではない。良く見てみると国情や国民性は随分違っており、「カナダとアメリカは隣同士の国なのに、なぜこんなにも違うのか?」というのが今の正直な感想である。

『水のなんでも小事典』
一飲み水から地球の水まで一

土木学会関西支部編

執筆者 盛岡 通 大阪大学助教授
奥田 朗 前建設省淀川工事事務所長
椎葉充晴 京都大学助教授
山本美子 株式会社水道設計事務所
出版社 講談社・ブルーバックス

■「水のなんでも小事典」執筆を終えて

大阪大学 盛岡 通

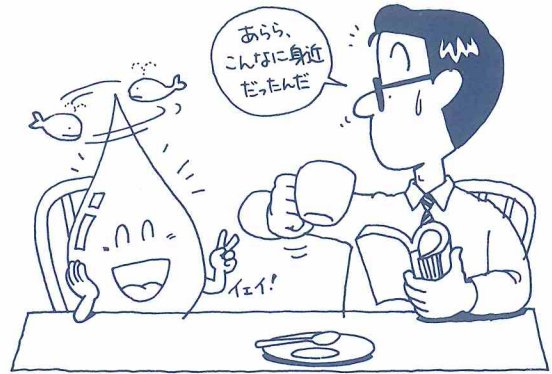
「水のなんでも小事典」の執筆者として何か書くように頼まれたのですが、校了をむかえて正直なところホッとした気分です。新書判で、250ページ足らずの小さい本ですが、3年前に字数の多いB-5変形判を一人で書きあげたときより手を焼いた印象が強いのです。その時は私にとっても気負いがあって、半年以上の時間を費し、自己主張ができたことは最高の喜びでした。

今回の「水のなんでも小事典」には内容についての注文が多くて困りました。身のまわりで顔を見せている技術についてすこし科学的に気のきいた説明をしようとすれば、いくつかの論理や事実を加えてみたくなるのが技術者の気持ちです。しかし、一般の読者は、数ある分野のなかで「土木」に興味を持ってくれるかどうか保証のかぎりではないのです。瀬戸大橋をみれば、斜張橋の景観に興味をもってくれても、一ヶ月もすれば、吉野ヶ里遺跡で那馬台国を想うのに気を奮われているというのが一般市民です。読者を一般市民とするとさえ聞こえはいいのですが、活字ばなれの著しい現代に、しかもやや大味な土木技術を訴えようとすれば、ターゲットを明確にしないと売れないという現状なのです。高学歴社会になったといっても、教養書として技術畑の入門書を読む人はほんのわずかです。

講談社の人は、大学卒のサラリーマンの普通の読みものは駅のスタンドの週刊誌だと言い、だから興味を引く素材でなければたとえ科学分野でも出版の企画はできないと忠告します。もちろん、技術専門書を発刊していて日頃からつきあいのある出版社からはそのような直言を聞くことはないでしょうが、初版の部数も販売する書店も極めて限られてしまうのです。

出版企画のなかでテーマが市民に身近な水となり、小生が相談を受けたのが去年の末でした。編集幹事の方がたは、すでに水に関する土木技術について項目をひろいあげていました。それは網羅的で、土木工学ハンドブックの応用技術編の項目だてにもつながるものでした。水理、水文・、河川、港湾・、治水、利水、と言ったタテワリがそこには見えました。それでは出版社に企画案として持ってゆけるかどうか不安でした。

小生は、朝起きて寝までの日常生活や旅先やふるさとで見たり、さわったりする「水」から話題を選ぶ方がよいと考えていたからです。この印象は、以前に大阪建設業協会のPR月刊誌に大阪水文化考シリーズを掲載させていただいたときに強く思ったことでした。技術畑の小さい本とは言え、物語性がなければ、魅力的でないと思えるようになったのもこの時以来です。



大阪水文化考を本にまとめたらというアドバイスを受けたときに、全国市場を相手にするのに「大阪モノ」は売れゆき不調と厳しい忠告をいただいたことも私の記憶に残っていました。だから、関西支部のカラーを出しながら土木技術のPRをしたいという当初の相談を受けたときには、ほんとうにとまどってしまったのです。

私自身の考えは、4月に執筆要領案としてまとめて、執筆者および編集幹事に肉づけをしてもらいました。

第一には本の題です。これは水、技術、暮らし、などのキーワードに、ブルーボックスのシリーズの「雑学事典」、「なんでも小事典」、「手帖」などをつぎ木することが試みられました。「水のテクノロジー」など技術者から発想しやすい題は、出版社の意向ですべて断われました。副題に「飲み水から地球の水まで」とつけたのは幸いでしたが、私は雑学の名称には最後までこだわりました。研究者、技術者に対する雑学派のレッテルを気にしたからです。

第二には、技術のおもしろさや専門上の優秀さよりも、むしろ暮らしの視点で切り込みをわかり、水と人間とのかかわりの歴史や文化の色彩を強調することでした。科学や技術については新鮮な驚きをさそうような鋭い切り口があるので、とりあげ方にとくに注意したかったので

す。

第三には、関西の土木技術のパイオニア的性格については自慢するところですが、それを抑えてできるだけ全国的で国際的な情報をつまむことにしました。また、図やイラストを多く使ったのも私の意図ですが、それも市民にわかりやすく訴えるためです。4人の執筆者、編集幹事会、および編集顧問の先生方の意向により市民に立脚した土木技術を紹介する原稿ができました。これを講談社は高く評価し初版本としては最高の2万部発行となりました。(10月20日店頭発売 定価640円)

私達4人の執筆者は、土木工学とはシビル・エンジニアリングだという想いをますます強くしました。

本の基本的な方向づけにもし誤りがあれば、執筆者代表としての私の責任です。読まれたときの印象、御批評をどうぞ私にお示し下さる様、この場をかりてお願いいたします。最後になりましたが、編集や執筆にあたりお世話になった多くの方がたに心よりお礼を申し上げます。

思えば、1989年ほどありとあらゆる分野で、『マドンナ』という言葉が使われたことはありませんでした。政治の世界で吹き荒れた『マドンナ』旋風は、土木の世界をも席捲し始めた感じでした。事実、関東学院大学には土木女子クラスがありますし、私の在籍する京都大学にも留学生を含めかなりの数の女子学生が学んでいます。加えて、いわゆる土木業界に就職する女子学生も、まだ少数ではありますが着実に増えていきます。そして、この土木の『マドンナ』たちは土木のイメージを変える切札の一つとして、とても大事にいただいているのです。

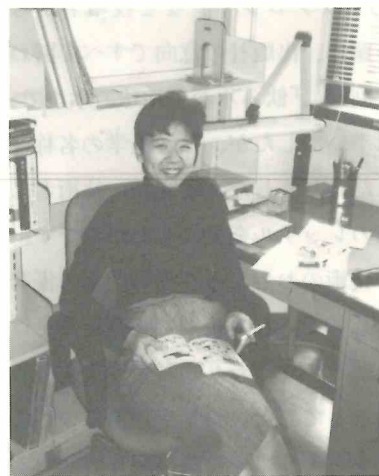
でも、ちょっと待って！皆さんは『マドンナ』に過剰な期待をかける『マドンナ』症候群にかかってはいませんか？土木の世界に『マドンナ』が増えたとしてもそんなに急に何かが変わるってものかしら？『マドンナ』は土木界のイメージアップの特効薬ではありません。それに、余り期待されてしまうと戸惑ってしまったりします。

だからといって、私が『土木の世界に女は不要』と唱える論者であるわけではありません。私も、この先やはり土木に関わって生きて行くでしょうが、その時に女性として何が出来るだろうかと期待し、女性だから何ができないだろうかと不安に思っている一人の学生なのですから。

■『マドンナ』症候群のみなさんへ
 京都大学大学院 起終点施設学研究室
 応用システム科学 専攻
 山田 菊子

他のどの世界においても同じでしょうが、女性がいるということは男性がいるということと全く同じようにごくごく普通の、むしろ正常な状態です。土木の世界もいま、その正常な状態に向けて転がり始めたところではないでしょうか。この転がって行く方向を、前もって決めてしまうよりも、むしろその流れに任せてしまう方が面白いような気がします。

どうぞもっと気楽に私たちをあなたの周りに受け入れてはくださいませでしょうか？そして、将来、この文章を読んで下さっている方々の周りに女性がいたら土木の世界がどう変わったか御一緒に確かめて頂けませんか？その時に、何らかの形で「都市」を相手にしている私がいればうれしいのですけれど。



日本に学ぶ ■
明石工業高等専門学校留学生
ABU SAMAH AZAHARI BIN
(マレーシア)

JAPPRIE HARON BIN
(マレーシア)

私はウングオマルポリテクを卒業して、日本に来てからも二年半経ちます。私は東京の国際学友会日本語学校で一年間日本語を勉強し、今は、明石工業高等専門学校で土木工学を学んでいます。私はマレーシア政府から奨学金をもらっているので一生懸命勉強して、日本の技術を持って帰りたいと思います。マレーシアの政治は7年前から路線を変更して東方政策をしているので、毎年約30人ほどのマレーシア留学生が日本へやって来ます。

マレーシアでは道路事情が悪く、都市計画や高速道路の整備が必要になっています。洪水対策も必要です。私は橋とか空港とかトンネルとか道路などの土木構造物に大変興味があります。学校から何度かそのような構造物を見に行きました。又、旅行をしながら色々な構造物を見てまわりました。学校で見るビデオなどもとても参考になり面白かったと思います。日本の土木の技術は大変素晴らしいと感じます。

現代では土木でもコンピューターを多く使っているのにおどろきました。これから土木の仕事をしていくために私も早くコンピューターをマスターしたいと思います。私にとって、色々な経験をするのはとても大切な事なので、卒業してから日本の会社で研究したいと思います。

そして、最終的には、マレーシアに帰って、公務員か建設会社で技術者として、土木事業の発展に努力したいと思います。

日本へ来る前に、既に日本という国の存在は知っていましたが、日本がどんな国かという事はほとんど知りませんでした。日本に到着した時、初めて日本人の顔を近くで見て、日本人がどんな性格を持っているのか、頭の中で考えていました。日本に来てから、もう3年になるが、色々な日本人の事を学んで、沢山日本人の事が分かってきました。最初留学生として日本の生活は大変な事かと思いましたが、現在ではもう大丈夫です。最初日本人を相手にするには困りました。というのは日本が外国人に対して、どのように見るのかまだ分かっていませんので、心配だったのです。しかし、今は日本人を相手にすることは心配もなくなりました。

日本人が親切な人々だということも分かりました。日本の進んだ土木技術を見ると、もっと勉強して日本の技術を国へ持って帰ろうと思います。私は、今、高専の土木学科四年で学んでいます。今、学校では日本人の同級生と一緒に土木を勉強していますが、分からない時、友達が教えてくれるのは本当にうれしいことです。仲間と協力すると授業が分かり易くなりました。私の国で年寄から聞いた話では日本人は戦争の時は大変厳しかったそうです。しかし現在の日本人は私が出合ったかぎりでは以前の厳しい日本人ではありません。私はできるだけ沢山の日本人の友人を作りたいと思っています。そして日本での生活を楽しまたいと思っています。

■“梅田地域の北上”

新しいキタの核を日ざして

阪急電鉄株式会社
角道 正士

大阪には「キタ」と「ミナミ」の繁華街がある。東京のように新宿、池袋などと駅名、地名を言わずに、二つの方角だけを言う。それだけで、その輪郭を大阪人は的確に描くことができる。

「キタ」は、阪急梅田駅、JR大阪駅を中心とした梅田界隈から曾根崎、堂島へかけての一带であり、「ミナミ」は道頓堀を中心に心齋橋筋、宗右衛門町、千日前、戎橋筋、難波にかけての界隈である。「キタ」は、大阪の表玄関として、阪急をはじめJR、阪神電鉄のターミナルを中心に発展し、街並みは「ミナミ」といささか趣を異にし、近代的な様相を呈している。

阪急では、大正14年の梅田阪急ビル(旧館)内の阪急マーケット開業以来、現在の阪急百貨店部分に当る梅田阪急ビル(新館)の拡張や昭和26年当時最も近代的なビルと噂された阪急航空ビルの建設、昭和37年その頃としては初めて地下駐車場を持つ新阪急ビルの建設などによりビル経営のノウハウを蓄積してきた。

こうした阪急の動きを契機に、梅田界隈にあいついでビル建設が進められ、オフィスビルをはじめ、ホテル、百貨店、映画館などのビルが建ち並んで、街の様相を少しずつ変えていき、昭和38年の梅田地下街の完成によって大阪の中心は「キタ」に移ってきたかのように、梅田の街は一変した。

しかしながら、これらの発展はすべて旧国鉄高架線以南に限られており、この頃の旧国鉄高

架線北側は、戦火を免がれた戦前からの古い家屋や戦争直後をしのばせるバラック建築が雑然と建ち並び、ひしめきあって、「駅裏」という言葉のイメージをそのまま伝えるような雰囲気であった。

このように旧国鉄高架線北側は、その駅裏のイメージによって、商業地域としては不毛の地とささやかれていただけに、輸送力増強の目的で新ターミナルを北側へ移設するプロジェクトにかける意気込みはすざましいものがあった。地上3階に駅をつくることはとにかく、問題は“裏町”のショッピングセンターづくりであった。地下2階にある2万4千平方メートルという巨大なスペースを商店街として生かすにはどうすれば良いかと担当者は日夜心血をそそいで考慮した。議論百出する中で、「自然」をテーマにした環境演出を試みるべきだという基本線が決定され、“水の都”大阪のイメージから「川の流れる地下街、阪急三番街」が昭和44年にオープンし、“第1次梅田地域の北上”が実現された。

また旧梅田駅跡地には、昭和52年当時としては高層の阪急グランドビルを竣工させ、阪急百貨店の拡張や阪急ファイブ、ナビオ阪急の竣工とあいまって梅田駅周辺に“阪急タウン”を展開している。

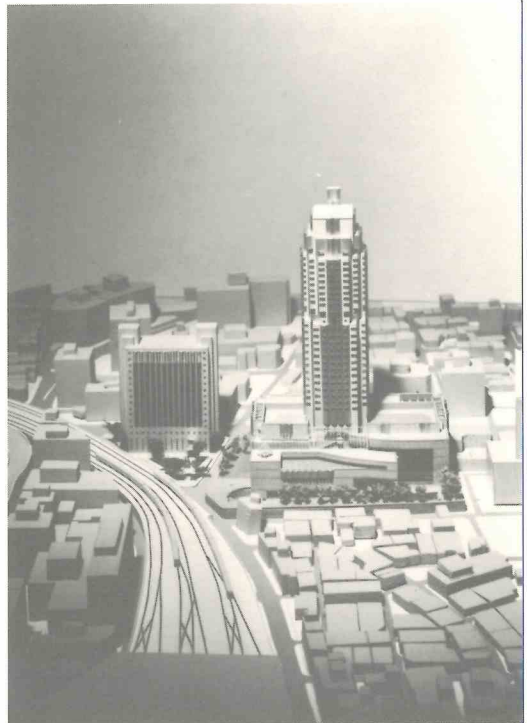
今回発表された北区茶屋町地区の再開発計画は、“第2次梅田地域の北上”の一環であり、同地区が阪急梅田駅の北約200メートル、新御堂筋から

西へ約200mと地の利も良く、現在同地に建設中の毎日放送本社ビルや平成2年開業予定の西武百貨店と共に「若者をはじめハイセンスな人々が集う新しい街」の創造を目ざしている。

開発計画の内容は、ホテルと劇場を中心とした大阪で2番目に高い複合レジュービル（高さ155m）と阪急電鉄本社ビル（高さ66m）の2本立てで、平成元年末から2年春にかけて着工、平成4年秋の完成を目ざしている。

阪急グループは梅田駅周辺に約33万5千平方メートルの土地を所有し、貸しビル、ホテル、地下商店街など多彩な“阪急タウン”を展開中であるが、阪急電鉄の小林社長は今回の事業計画について、「大阪・キタの新しい核にしたい。将来は梅田地域を淀川べりまで拡大するのが理想」としている。

また電鉄本社ビル近くではJR西日本本社の移転計画や同本社跡地と梅田貨物駅跡地周辺を大規模開発する構想もあり、将来梅田駅周辺は一段とにぎわいを増しそうである。



■ 広報

- 技術革新講演会(2題)
 - 1月18日(木)14時より 建設交流館
- 会員懇親会・水のなんでも小事典出版記念パーティ
 - 1月18日(木)17時より 建設交流館
- 施工技術報告会(8題)
 - 1月23日(火) 9時30分より 建設交流館
- 施工トラブルとその対策 講習会(11題)
 - 2月20日(火)、21日(水) 9時より 建設交流館
- 2年度関西支部年次学術講演会講演募集
 - 講演申込〆切 1月12日(金)

- 関西支部技術賞募集・土木学会賞支部推薦募集
 - 応募〆切 12月11日(月)

■ 編集後記

- 本号に初めてFrom the outsideのページを設けました。他分野の方からの意見は、日頃、細分化された専門にのめり込んでいる私達に、土木本来の姿を思い起こさせてくれるのではないのでしょうか。
- 表紙：関西国際空港建設現場
(関西国際空港株式会社提供)
- 編集幹事：青木、大石、川谷、竹居、則武、本久



編集・発行
社団法人 土木学会関西支部
大阪市中央区船場中央2丁目1番4-409号
TEL.06-271-6686 FAX.06-271-6485

